

キャリアガイダンスプログラムの開発研究

——高大連携による進路指導実践の試み——

内田伸子¹ 鷹野光行²
浅見道明 石井朋子 村野光則³ 長谷部比呂美⁴

本稿は、お茶の水女子大学附属高等学校とお茶の水女子大学の連携により、2002年度より発足した研究プロジェクトにおける進路指導実践を概観したものである。本プロジェクトは、自らの生き方をみつめ、主体的に進路を選択決定するために必要な「自己指導能力」を伸長するためのキャリアガイダンス（進路指導）の在り方を検討し、卒業年次にかたよらず、高等学校3年間を通じたガイダンスプログラムを研究開発することを目的としている。

プロジェクト初年度は、高大連携による進路指導実践の一環として、試行的にお茶の水女子大学教官によるキャリアガイダンス講演会を開催（全3回）した。附属高等学校第1、2学年の生徒を対象とし、各回の講演についての感想や評価・進路意識に関するアンケート調査等をあわせて実施した。それらの分析結果から、各学年段階の進路成熟（発達）に配慮した適切な進路情報の提供が必要であること、また、提供された進路情報の活用に対する動機づけとなるような個別的ガイダンスの必要性も示唆された。以上より、各学年のキャリアガイダンス（進路指導）の実施時期・内容・形態等について検討し、プロジェクト次年度の年間計画を立案した。

1. プロジェクトの目的

本プロジェクトは、高等学校における進路指導を、大学との連携によってより開かれたものとし、高校生を主体的な進路選択のための「自己指導能力」伸長を目指すキャリアガイダンス（進路指導）プログラムを研究開発することを目的としている。そのために、お茶の水女子大学附属高等学校とお茶の水女子大学は、高大連携による研究開発プロジェクトを、2002年度より3年計画として発足した。本稿は、プロジェクト初年度（2002年度）の実践を概観するものである。

高等学校学習指導要領には、「教育課程の編成・実施にあたって配慮すべき事項」として、「生徒が自らの在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行う（第1章総則第6款）」と明記されている（文部科学省、1999）。しかし、高等学校現場における進路指導の現状については、指導が高校3年間

の教育活動全体を通じて行われているとは言い難く、卒業年次に集中した受験対策指導や就職指導などの進路先振り分け的な指導の傾向がみられることが指摘されている（足立、1992；下山、1983、1984；吉中、1994、ほか）。松村・古川・内藤（1994）の調査結果では、学校現場で出口指導と呼ばれる受験指導に力が入れている実態と、その影響で自らの生き方に関する高校生の意識が低いことが推察され、「自己のあり方を考え、主体的な自己決定を目指した進路指導の姿というものが見えてこない」（松村ら、1994、P37）ことが指摘されている。また、近年、大学入学後の転学転学科や中途退学・「不登校」等、大学生の不適応の増加がみられることから、高等学校段階における進路指導の重要性があらためて認識されてきている。大学生にみられる様々な不適応について、進学目的の不明確さや無目的な進学、ネームバリュー志向にも一因があると考えられるからである。お茶の水女子大学附属高等学校の卒業生のなかにも、大学への入学後、学部学科の内容が興味関心と一致せず、次年度に再受験す

キーワード：自己指導能力、進路情報提供のあり方、進学志望動機、キャリア・カウンセリング、高大連携

1 お茶の水女子大学大学院 2 お茶の水女子大学文教育学部、お茶の水女子大学附属高等学校長

3 お茶の水女子大学附属高等学校 4 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

るものが毎年数名存在する。

すでに1980年代に、アパシーやモラトリアム等、大学生の不適應が問題とされ、その原因として、大学入学以前の進路決定の未熟さ・模索なしの安易な進路決定の在り方が指摘されている(下山, 1982, 1983, 1984)。1990年代には、大学のレジャーランド化がいわれ、講義への遅刻・欠席、ゼミ発表の粗末さ、学問よりもアルバイト中心の学生生活など、大学教育における多くの問題状況から、どのような目的をもって入学してきているのか、進学志望動機の検討がなされてきた(古市, 1993, ほか)。さらに、講義中の私語の多発やいねむり・化粧や携帯メール、課題レポート等に取り組む意欲の低さ等々、ますます多くの問題が散見される近年の現状に、高等学校在学中における進路指導へのニーズがいつそう高まっている。求められているのは、学習成績による進路先振り分けの出口指導ではなく、高校生が将来を展望し、生き方の方向性をベースにした進学目的を明確にもつことができるような進路指導である。

そこで、本プロジェクトでは、高校生が将来の在り方を見つめ進学目的を明確にして、主体的な進路選択決定をするために必要な「自己指導能力」を育成するためのキャリアガイダンスプログラムを高大連携により研究開発することを目指す。

II. 2002年度の研究活動内容

【目的】

高校生にとって、自らの将来を展望し主体的に進路を選択決定することは、高校生活3年間を通して達成すべき重要な課題である。

2002年度、本プロジェクトでは、卒業年次にかたよらず高校3年間を通じた進路選択決定能力の育成を目指し、それぞれの学年の進路発達(成熟)段階に適したキャリアガイダンス(進路指導)プログラムを開発研究することを試みる。

プロジェクト初年度は、高大連携による進路指導実践として、試行的に、大学教官によるキャリアガイダンス講演会を実施する。大学教官のキャリアガイダンス講演によりさまざまな領域の学問研究にふれることによって、自らの進路についてより具体的な関心をもたせ進路意識を深めさせることを目的とする。また、お茶の水女子大学における高校生の体験授業について、その可能性を探る。あわせて、各回のキャリアガイダンス講演に対する附属高校生の反応・感想や進路

意識に関するアンケート調査を実施し、各学年次のキャリアガイダンス(進路指導)の適切な時期・内容・形態等について検討し、次年度以降の年間計画を立案する。

【活動概要—キャリアガイダンス講演会実施概要】

キャリアガイダンス講演会を全3回開催した。

〈第1回〉「青年期女性の進路形成について」

講師：武蔵大学 中西祐子助教授

実施日時：2002年11月18日 6限

対象：1、2年生

会場：お茶の水女子大学附属高等学校体育館

〈第2回〉「経済学という学問について」

講師：お茶の水女子大学 篠塚英子教授

実施日時：2002年12月3日 4限

対象：1年生

会場：お茶の水女子大学附属高等学校
体育館2階併室

〈第3回〉「食物科学が取り組んでいること」

講師：お茶の水女子大学 久保田紀久枝教授

実施日時：2003年2月20日 6限

対象：1、2年生

会場：お茶の水女子大学共通講義棟2号館201

以上の講演会は、保護者にも開いた会とし、第1回、第3回には、数名の参加があった。

【調査の概要】

第1回、第2回キャリアガイダンス講演終了時には、講演の感想(自由記述式)と進路に関するアンケート調査項目への回答を求めた。第3回には、感想の自由記述に加えて次年度実施予定の調査のための予備調査として質問紙調査をあわせて実施した。本稿では、第3回キャリアガイダンス講演終了時に実施した質問紙調査(予備調査)の概要を以下に報告する。

1. 調査対象・手続き

調査対象：お茶の水女子大学附属高校1、2年生

調査手続き：調査時期は、2003年2月。第3回キャリアガイダンス講演終了後に、講演についての感想の自由記述とともに、進路情報活用、大学志望動機等に関する質問紙調査を実施した。調査時間は感想の記述を含めて10分程度のものとした。キャリアガイダンス講演会は、附属高校の通常の授業時間の中に組み入れて設定されたため、生徒の負担や授業時間割に配慮して、質問項目を絞りできるだけ短時間で実施可能な調

査とした。調査方法は集団調査とし、講演会場で一斉に質問紙を配布し、調査終了時に回収した。有効回答数は、計207名。

2. 調査項目

調査項目は、進路情報活用、進路指導を受けた経験、大学志望動機に関するものである。プロジェクト初年度である2002年度の調査は、次年度以降の予備的段階の調査と位置づけ、質問項目の一部について、調査結果の比較可能な先行研究と同一の質問項目を用いた。同一の項目を用いたのは、本研究の調査対象者と同じく大学進学希望の高校生を対象とした(八木、齋藤、牟田、2000)の、進学に関する情報の入手先及び活用に関する質問項目と、大学進学志望動機に関する質問項目である。本調査では、それらの項目に加えて、高大連携プロジェクトによって提供された具体的進路情報として、「キャリアガイダンス講演」についての有用性とその理由、高校生活において受けた経験のある進路指導についても回答をもとめた。

回答法については、進学に関する情報の入手先及び有用度に関する質問項目に対する回答は、先行研究(八木ら、2000)と同様に、まず、10項目の情報源に対し利用しているか否かについて質問し、さらにその有用度に関して、「1：全く役に立たない」、「2：あまり役に立たない」、「3：どちらともいえない」、「4：やや役に立つ」、「5：とても役に立つ」の5件法で回答を求めた。

キャリアガイダンス講演については、進路を考えるときにどのくらい役立つと思うか、その有用度について、「1：全く役に立たない」、「2：あまり役に立たない」、「3：どちらともいえない」、「4：やや役に立つ」、「5：とても役に立つ」の5件法で回答を求め、さらに、その理由について自由記述式で回答してもらった。

高校生活において受けた経験のある進路指導についての回答は、6項目の質問について、まず経験の有無を質問し、さらにその有用度に関して、「1：全く役に立たない」、「2：あまり役に立たない」、「3：どちらともいえない」、「4：やや役に立つ」、「5：とても役に立つ」の5件法で回答を求めた。

大学進学志望動機に関する21の質問項目については、先行研究(八木ら、2000)と同様、「1：全くそう思わない」、「2：あまりそう思わない」、「3：どちらともいえない」、「4：ややそう思う」、「5：とてもそう思う」の5件法で回答を求めた。

【調査結果】

本稿では、調査結果のうち、[1.キャリアガイダンス講演の有用度]、[2.進路情報活用(1)利用率と(2)有用度]、[3.進路指導を受けた経験]に関する調査項目についての主要な結果のみを整理するものである。なお、調査項目のうち、大学志望動機についての質問項目に関する因子分析等による検討結果の詳細は、COE研究報告書*1(2004, P182-189)に報告した。

1. キャリアガイダンス講演の有用度

キャリアガイダンス講演(全3回実施)の有用度について、第1学年と第2学年の間に有意差がみられた($P < .01$)。講演の受講回数について、第1学年は全3回、第2学年はうち2回の受講と違いがあるため単純比較はできないが、講演といった形態によって提供された進路情報は、さまざまな情報にふれることにより進路選択に対する視野を広げる段階にある第1学年にとってより有用と捉えられたものと考えられる。第2学年については、以下のような回答に記された理由にみられるように、進路の選択決定の時期とキャリアガイダンス講演の受講時期のずれにより有用度が低く評定されたものと推察される。

<有用度に関する理由>

① “役に立たない”と回答した者の理由

“役に立たない”(「全く役に立たない」および「あまり役に立たない」という回答にみられる理由については、第1学年と比較して有用度が有意に低かった第2学年の回答の大半に、

「自分の希望する進路とキャリアガイダンス講演内容が異なり興味が持てない」

という同じ趣旨の記述がみられる。

また、

「すでに進路が決まっている・ガイダンスの時期が遅すぎる」

という理由をあげたものが13名あった。

これらの回答から、本年度の全3回のキャリアガイダンス講演の実施時期(11月～2月)には、すでに第2学年の多くの生徒は進路(希望)をほぼ決定していることがわかる。次年度の実施計画においては、キャ

リアガイダンス講演の開催時期の再検討、あるいは受講対象学年について再検討する必要があることが示唆された。

② “役に立つ”と回答した者の理由

以下は、“役に立つ”（「とても役に立つ」および「やや役に立つ」）という回答にみられる理由についての記述例である。

「普段触れる機会の少ない分野にも興味もてるから。」

「各分野の専門家のお話が聞いて参考になったから。」

「様々な分野を知ることで視野が広がるし、自分が何をしたいのか、学びたいのかを見つけるきっかけになるから。」

「いろんな大学の学部の話が聞け、その学部が将来どの職につながるのかが分かったから。」

「進路っていうものは本当に人それぞれの色々な道があるんだ！！というのがよく分かったから。」

「自分の知らなかった学問を知ったり、先生方の進路や生き方について聞いて参考になったり共感できたりした為。」

「様々な分野の話を聞いて、自分に問うことができたから。」

「今まで自分の将来について考える時間が学校ではなかったから。」など。

これらの回答にみられるように、学問分野や職業に

についての興味や視野がひろがった、将来について考えるきっかけを得た、啓発されたという記述には、講演内容を単に学部学科の選択に関する情報と捉えるだけでなく、自己の生き方と向き合う啓発的経験として受けとめていることが推察され、「キャリアガイダンス講演」という進路情報提供の有用性がうかがわれる。また、上記以外の回答の中には、講演内容に対する感想にこと寄せて、自らの進路選択についての迷いや進路決定できない不安についての記述も少なからずみられ、そうした生徒への指導・援助の方法を検討することの必要性が示唆された。

2. 進路情報活用

(1) 進学に関する情報源の利用率

進学に関する各情報源の利用率を Figure 1 に示す。

「学校」からの情報を利用していると回答した者は、63.3%（第1学年と第2学年の平均）であった。これは、情報源として「家族」「知人」「書籍・専門書」「受験雑誌」「塾や予備校」各々の利用率よりも低く、「学校」からの情報がその他と比較してあまり活用されていない実態が示された。「塾や予備校」「受験雑誌」の利用率の方が「学校」からの情報より高いことから、将来を展望し自らの生き方に向き合う進路選択のプロセスにおいて情報が活用されているというよりも、目先の進学先決定や入試対策のために情報が利用されている実態がうかがわれる。この結果から、高校生の進路選択が、自己を知り可能性を発見して未来と自分を結びつけるプロセスとなっておらず、自らの将来展望を閉塞したところで行われている傾向が推察される。また、「学校からの情報」が「家族」「知人」からの情

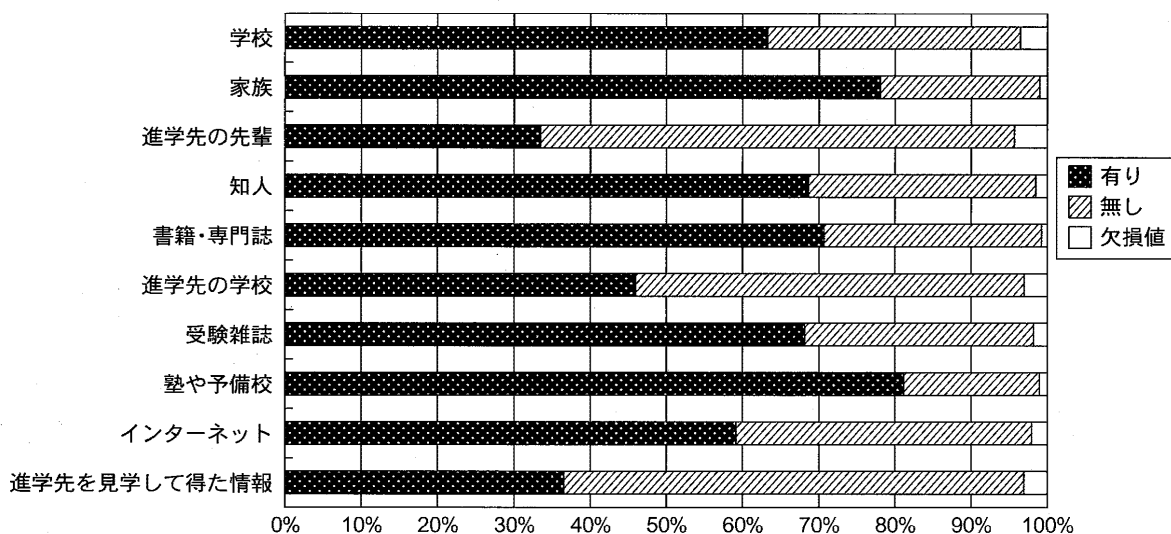


Figure 1 進学に関する情報利用の有無

報と比較して利用率が低いことに関連して、高校生の進路発達（成熟）に影響を与えるエイジェントについて検討した清水・坂柳（1988）の研究でも、父親・母親・友人・教師を比較すると、教師の影響は他のエイジェントよりも低いことが報告されている。

(2) 情報源の有用度についての比較

進学に関する各情報源の有用度の平均値を Figure 2 に示す。

「学校」からの情報の有用度は、10項目の情報源の有用度の平均値のうち最も低い。「学校」からの情報と、学校以外からの各情報の有用度を検定した結果、「学校」からの情報の有用度 (mean=3.26, S.D.=0.86) は、他のいずれの情報源と比較しても有意に低いことが示された ($p < .01$) (たとえば、「家族」からの情報と比較すると $t = -3.76$, $df = 108$, $p < .01$) 同一の質問項目の先行研究、八木ら（2000）の調査結果でも、「学校」からの情報は、他の項目と比較して有用度が高くないことが示されている（10項目中7位）が、八木ら（2000）の結果のうち有用度が一番低いのは、「家族」からの情報である。本調査結果において、「学校」からの情報が利用率の低さに加えてその有用度も低く評定されたことから、学校の提供する進路情報が生徒の進路選択のプロセスにおける援助資源として十分とはいえないことがうかがわれる。しかし、高等学校における進路情報の提供は、特化した進路指導におけるものだけではない。日々の授業や課外活動などのすべての教育活動において豊富な進路情報が存在する。進路情報の利用率とその有用度に関する本結果からは、学校のそれら豊かな情報資源が必ずしも有効に活用さ

れていない実態が推察される。高等学校内外の人的物的情報資源を取り込んで提供していくことは学校進路指導上の課題の一つであるが、適切な進路情報の提供があってもそのみでは、生徒が有効にその情報を活用できるとはかぎらない。提供された進路情報の活用に対する動機づけに配慮したキャリアガイダンス（進路指導）のあり方 (Watts, A. G., 1977, 1983) を検討する必要もあることが示唆される。

また、「学校」からの情報の有用度については第1学年と第2学年の学年間に有意差がみられ ($P < .01$)、第1学年の方が学校からの情報が役に立つと評定していることが明らかになった。これは、第1学年の段階では、進路の選択決定にまだ時間的余裕があるため、進学先の決定や受験についての具体的情報を求めるための自主的な進路情報収集があまりなされておらず²、第2学年と比較して「学校」からの情報を有用と捉えているものと推察される。

3. 受けた進路指導の有用度

〈項目「進路についての個別面談」〉

高校に入学してからロングホームルームや放課後の時間も含めて、受けた経験のある進路指導として、「進路についての個別面談」の割合は、第2学年で、12.5%、そのうち有用と評定しているのは、46.2%（「やや役に立つ」23.1%と「とても役に立つ」23.1%の合計）である。調査時期（2月）は、第3学年への進級を目前とした時期であるが、自らの進路について個別の相談を経験している者がまだわずかであるという実態が示され、また、経験した者のうち約半数はそれを有用ととらえていることが分かった。第2学年の段階では、

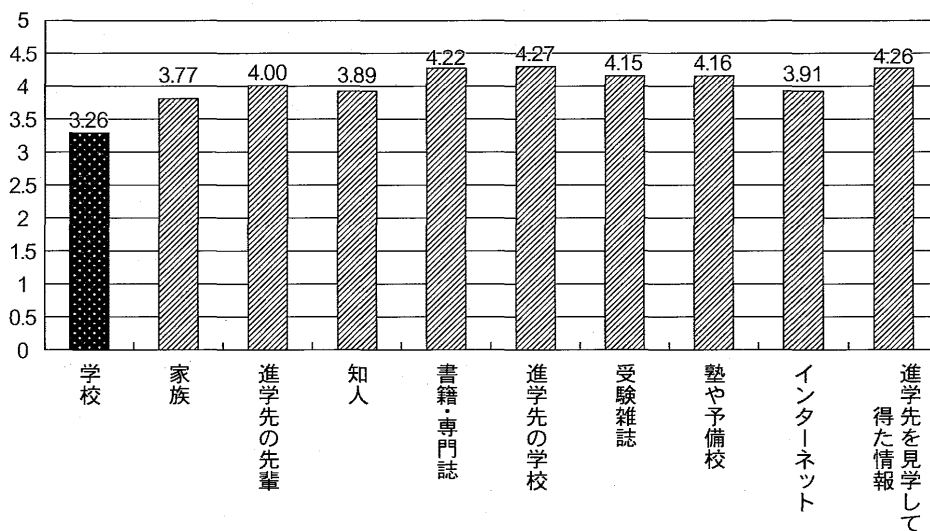


Figure 2 進学に関する情報の有用度の平均値

広く進路選択のための情報を収集するだけでなく、自己理解を深め将来の生き方を考えて、自己に開かれているさまざまな進路と結びつけてその選択について考察することが必要であろう。そのプロセスを援助するために個別的相談機会の提供を試みることの有用性が、本結果から示唆される。

III. 2003年度の課題

本稿では、主として、お茶の水女子大学附属高校とお茶の水女子大学との高大連携プロジェクトにおいて、2002年度に実施された調査結果の一部について概観した。本稿で用いたデータは大学付属の高等学校1校のみを調査対象とした極めて限定的なものであり、その分析も進路指導実践上の全データの包括的検討を行ったものではない。しかし、従来、主として高等学校に閉じられたなかでおこなわれてきた進路指導を、大学との連携によってより開かれた実践として試み、その実践に関わる具体的データを含めて進路指導の在り方について検討した。これまでに得られた結果からは、各学年段階の進路成熟（発達）に応じ、自己をみつめて、自分の可能性をみつけ、自分自身で進路を選択し決定するための情報提供が必要であること、また、提供された進路情報の活用への動機づけとなるような個別的ガイダンスが必要であることが示唆された。

そこで、次年度プロジェクトにおいては、とくに各学年の進路成熟と情報提供との関連や主体的な進路選択への動機づけに配慮したキャリアガイダンス（進路指導）プログラムとして、次の2点の実施を計画する。

① 高校入学後の一年間は、主として、大学における学問研究のあり方等さまざまな進路情報にふれることにより進路選択に対する視野を広げる段階として、附属高校1年生を対象としたオープンキャンパス*3を実施する。

② 第2学年の1年間は、一人一人の生徒が自己理解を深め、将来の自己の生き方を考え自己に開かれている進路と結びつけて考察し、自らの進路選択を具体的に進めていくための個別的援助の必要な段階ととらえ、キャリア・カウンセリングの実施を計画する。

さらに、次年度以降は、他校での進路指導実践においても援用可能なキャリアガイダンスプログラムの開発のために、本プロジェクトの進路指導実践からのデータを積み上げ詳細な分析・検討を重ねていくことが課題である。

〈長谷部比呂美〉

注

- * 1 お茶の水女子大学21世紀COEプログラムプロジェクトII平成15年度研究報告書(2004, P.182-P.189)
- * 2 第1学年に対する進路意識調査結果による(お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター年報第1号, 2003, P.61)
- * 3 大学研究室への訪問、教官・スタッフとの交流、模擬授業等により大学における学問分野の研究に触れることなどを旨とするものであるが、高大連携による高校生のための進路指導を目的としており、各大学で一般に学生募集のために開催されているオープンキャンパスの企画とは異なる。

引用文献

- 淵上克義 1984 進学志望の意志決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 1, 59-63.
- 古市裕一 1993 大学生の大学進学動機と価値意識 進路指導研究, 14, 1-7.
- 松村英男, 古川雅文, 内藤勇次 1994 高等学校進路指導に対する関係者の態度に関する研究 進路指導研究, 15, 37-44.
- 斉藤浩一 1996 大学志望動機の高等学校間格差に関する実証的研究 進路指導研究, 17(1), 28-36.
- 清水和秋, 坂柳恒夫, 1988 進路不決断と進路成熟—父親, 母親, 友人, 教師の影響に関する高校生の縦断的研究 進路指導研究, 9, 28-36.
- 下山晴彦 1982 高校生の人格発達と進路決定 —テストバッテリーを用いた縦断的事例研究— 東京大学教育学部紀要, 22, 211-222.
- 下山晴彦 1983 高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての研究 教育心理学研究, 31, 2, 56-61.
- 下山晴彦 1984 ある高校の進路決定過程の縦断的研究 教育心理学研究, 32, 3, 43-49.
- 八木晶子, 齋藤貴浩, 牟田博光 2000 高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析 進路指導研究, 20, 1, 1-7.
- 柳井晴夫, 清水留三郎, 前川眞一, 鈴木規夫 1989 進路指導と大学情報に関する調査結果の分析 大学入試センター研究紀要 18, 1-71.
- 吉中 淳 1994 高校生の進路選択における計画性を

規定する要因の分析的研究 — 四年制大学進学希望者を対象に — 進路指導研究, 15, 20-29.

Watts, A. G. 1977 Schools, careers and community: A study of some approaches to careers education in schools. London: CIO Publishing.

Watts, A. G. 1983 Changing structures and conceptions of careers guidance in British schools. Journal of the Counseling Institute of Sophia University, 8, 14-26.

付記

本稿は、お茶の水女子大学 21世紀COEプログラムプロジェクトII平成15年度研究報告書(2004)に発表したものの一部を加筆修正したものである。